

東京大学
総合研究博物館
小石川分館
Koishikawa Annex
The University Museum
The University of Tokyo

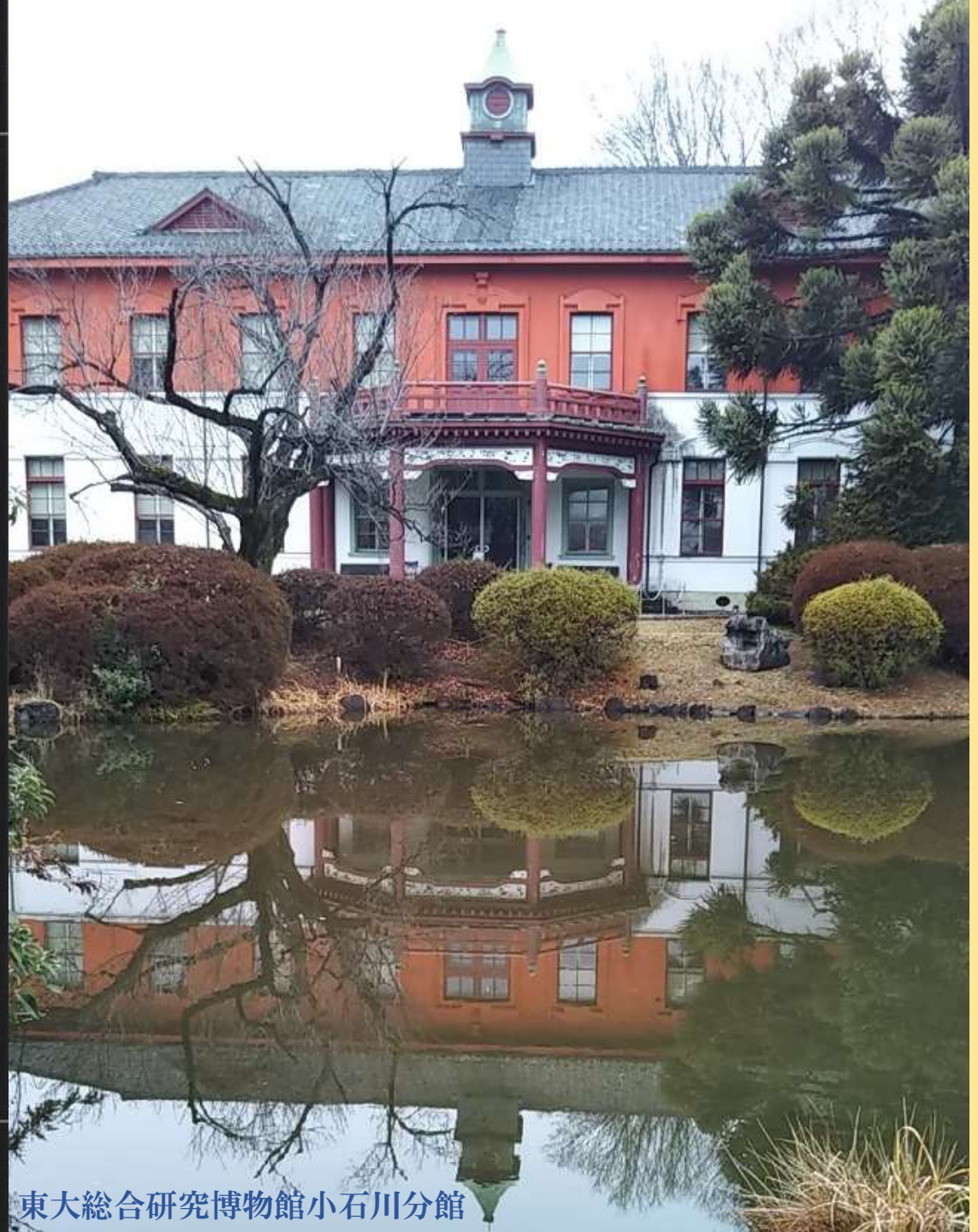


小石川分館 特別展示

貝の建築学

ARCHITECTURE OF SHELLS

2019.10.26 [sat]—2020.3.15 [sun]



東大総合研究博物館小石川分館

東京新聞の記事を見て、東京大学総合研究博物館小石川分館で開催中の『貝の建築学』特別展に…

螺旋は生物が作り出す不思議な構造のひとつ、貝は自然界の建築家だ！

2020. 1. 23.

螺旋は生物が作り出す不思議な構造のひとつである。その代表例が巻貝であり、極めて規則的に成長する。貝殻の成長は、「等角螺旋」と「付加成長」という2つのキーワードで説明される。等角螺旋とは螺旋の1種であり、螺旋の中心に対して一定の角度を保ちつつ殻が拡大する成長様式である。付加成長は一旦形成した部分の形や大きさを変更することなく、表面に殻成分を追加することで大きくなる成長様式である。これは屋根や壁を継ぎ足しながら建物を拡張する建築方式に相当する。

貝は貝殻を自ら形成し、その中で暮らしている。そのため、貝殻は貝の建築物と見なすことができる。貝殻を高倍率で拡大すれば、無数の結晶が規則正しく配列する様子が観察され、貝は煉瓦やブロックに相当する結晶を積み重ねながら建築物となる貝殻を作り上げていることが分かる。ミクロな結晶を成長させつつ貝殻全体の形を制御する機構は謎であり、自然の驚異である。

本特別展では建築物としての観点から貝殻の形の統一性と多様性を示すことを目的とし、世界各地から収集された貝殻標本を多数公開する。特に、貝殻の内部構造を示す切断標本は100種以上作成しており、前例のない規模で公開する。

佐々木猛智（東京大学総合研究博物館准教授）

『貝の建築学』特別展パンフレットより

2020年(令和2年)1月21日(火曜日) 11版 28



らせん構造がよくわかる切断標本。写真はハルシャガイ

貝は自然界の建築家だ。自分で材料を作り出し、それを使って、ぐるぐる巻きだったり、細長く伸びたり、部屋がたくさんあったり、個性豊かな自分だけの「すみか」を構築する。そんな不思議に触れられる特別展示が、東京大学総合研究博物館小石川分館（文京区白山）で開かれている。



文京区の東大総合研究博物館小石川分館で「貝の建築学展」について話す佐々木猛智准教授。展示ケースは貝のらせん構造をイメージ

1月21日付け東京新聞より



マンボウガイ



イマキボラ



タケノコガイ



ナンヨウダカラ



ジャノメダカラ



ホネガイ



ニクイロヒタチオビ



ツマベニヒガイ



シメナワミノムシ



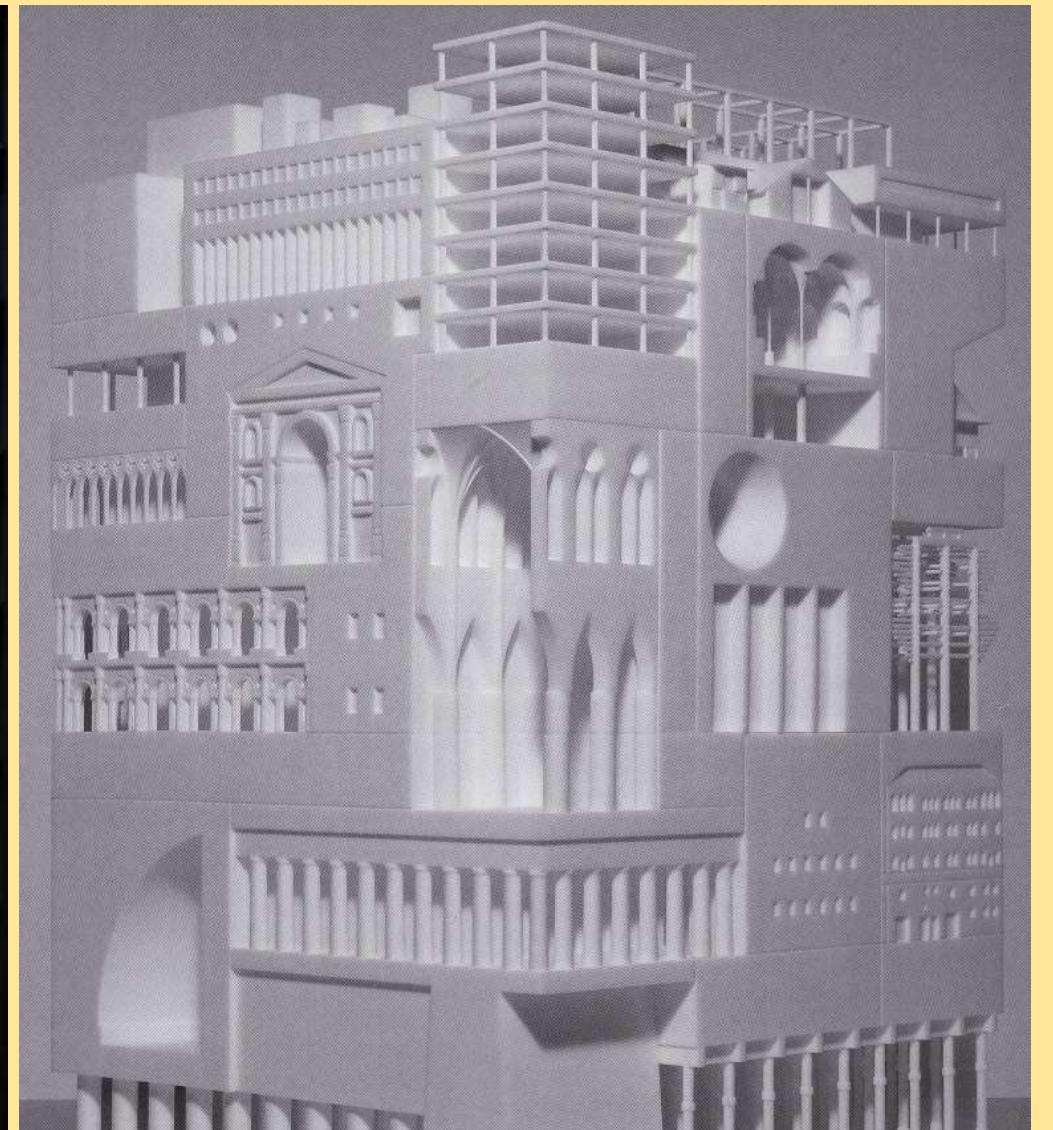
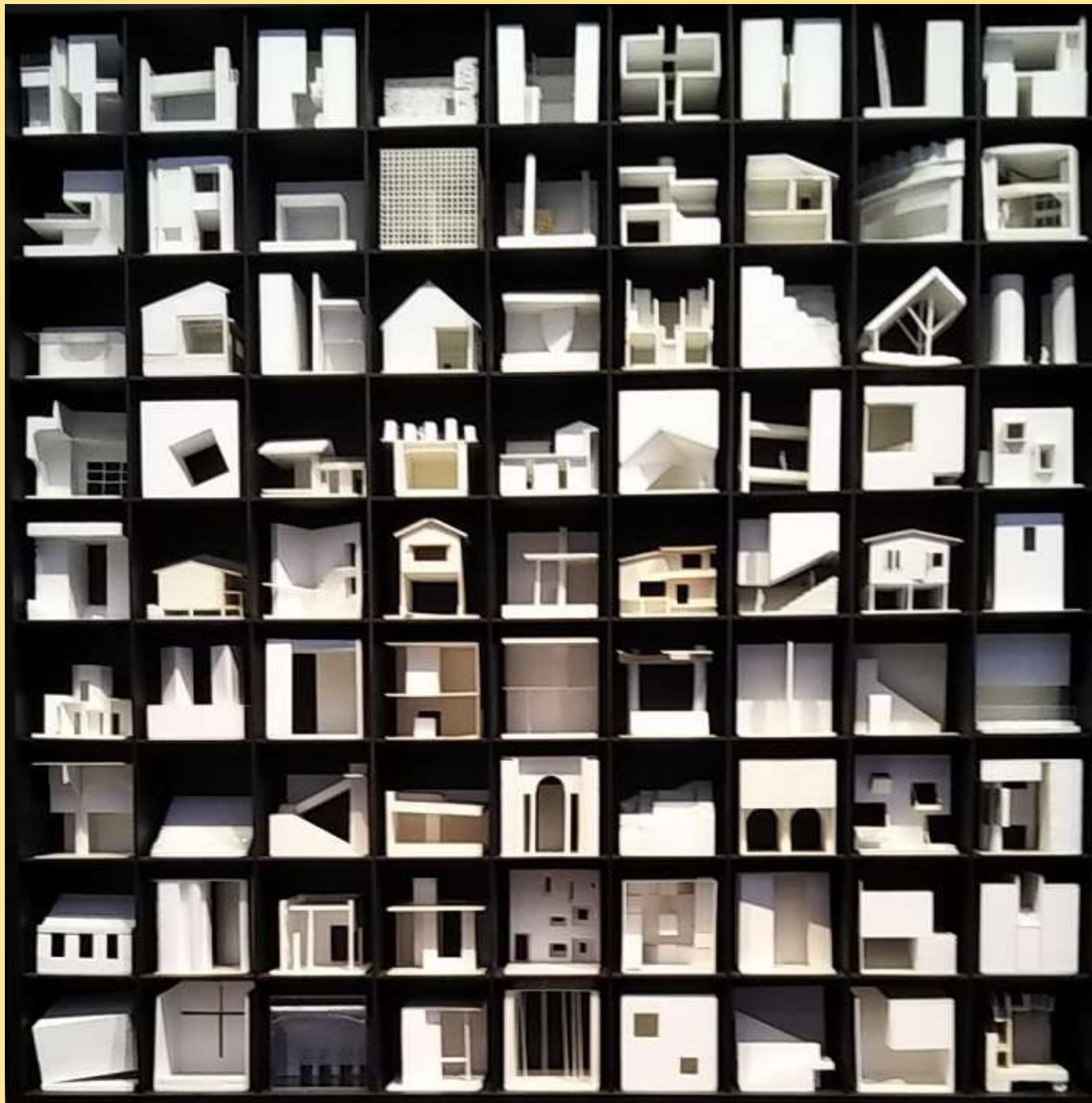
ウミウサギ



ネジボラ

巻き貝の断面

『貝の建築学』特別展より



東京大学総合研究博物館小石川分館常設展示
『建築博物誌／アーキテクトニカ』より